

News Letter



ヒサカキの葉裏にしっかりつかまるウラギンシジミ。
その爪跡が葉に残る程である。

翌年から、ウラギンの越冬調査を始めた。普通、年2回発生し、成虫で越冬する。越冬に利用される場所は、山の南西向きのはげが最も多い。越冬個体は夏過ぎに発生し、翅先が鋭く尖るのが特長だ。ほどよく隙間のある常緑樹の葉裏で、葉の中心からはずれた位置に、頭を下に向けてとまる。翅は閉じられ、触角はその間に挟み込む。翅の裏は、余りにも白く、ウラギンシジミの名に恥じない。

こんなに白くては目立ち過ぎるように思うが、陽を受けた照葉樹の中では不思議と目立たず、なかなか見つけれない。

11、12月の調査は実に楽しい。「ここにもいたか」と新しい個体をどんどん見つけられる。しかし年が明けるところから様相は一変する。調査は暗く辛いものとなる。

「先週までいたのに…」

ウラギンの姿が見当たらない。

「だめだったのだろうか。」

信じたくない思いで樹の下を捜す。そこに、後味の悪い現実を見ることがしばしばある…。

残念ながら越冬成功率はあまり高くはない。ここ数年の調査で、多い年でも60頭

ウラギンシジミという小さな蝶がいる。実物を最初に見たのは高校生の時。場所は母の実家、岡山でのことだ。比較的暖地に多く、東京近郊ではあまり見た記憶がなかった。

私のメインフィールドは多摩丘陵である。通い始めて16年、最も多い年は、年間51回も足を運んだ。この間に約1000種の昆虫、800種の植物、100種の鳥、その他とりあわせて200種ほどの生き物の記録がとれた。写真に納められたものだけでも500種に上る。写真を整理すると、この中で最もたくさん撮られていたのがウラギンシジミなのだ。

きっかけは、知り合いに、ウラギンシジミの越冬を知らされたこと。シラカシの葉裏にとまる、白い蝶を見ながら、このままじっと一冬を過ごすと教えられた。雪や寒風の中をただひたすら耐える姿を想像し、何とも感慨深い思いに襲われた。

常磐木の葉裏で…

常磐木の葉裏で…



↑雨に打たれたウラギンシジミ。濡れた
その羽が少しやぶれている。

中7頭。少ない年には、32頭中1頭しか越冬を成功させていない。

ある年、最後まで頑張り冬を乗り切った個体を、ヒサカキの葉裏に見た。寒さに耐え、乾燥に耐えたその個体は、春の暖かい雨に打たれ、翅にしずくを光らせていた。「これが最後の試練なのだ」と思いながらしみじみ眺めたものだ。

1週間後には、ヒサカキが開花した。春の訪れと、越冬の成功を祝福しているかのようであった。次に訪れた時、すでにウラギンの姿は無かった。しかし、今回は木の下を捜そうとは思わない。

春の日差しが、とてもまぶしい午後だった。

(代表取締役会長・仁井雄治)



↑ヒサカキの花が咲いた。春がきたのだ。

自然環境

調査

仕事という

前回は、環境アセスメントにおける自然環境調査の推移と、我々調査者が現地調査からデータをまとめて成果に至るまでの流れを簡単に紹介した。今回は、いくつかの調査事例から「都市域での生きものとの共生」について考える。

カラスのねぐら



都市近郊の大規模公園予定地において、鳥類調査を行なった際、ハシブトガラスが多く観察された。予定地の隣接地には住宅団地があり、団地から出るゴミがカラスを集めていると思われる。さらに、予定地の一部にはシラカシの常緑樹林があり、これが格好の隠れ家になっているようである。東京都区内のカラスのねぐらとしては、白金の自然教育園と明治神宮の森が有名だが、ともに樹高の高い常緑樹の森である。最も大きいねぐらを作る冬には、葉の落ちない常緑樹林が身を隠すのに都合が良い。以前、調査を行なったことのある川崎市の緑ヶ丘霊園では千羽近い大きなねぐらを確認したが、ここもやはり常緑樹のシラカシが多い森であった。



さて、前述の公園予定地の隣接地には動物園が計画されている。多摩動物公園の例では動物園で餌をとるカラスが、隣接する樹林地で約千羽のねぐらを形成している。常緑樹林のあるこの公園予定地でも、将来、隣接する動物園で餌をとるカラスがねぐらを作るこ

とが考えられる。カラスのねぐらは、他の鳥類の生息を圧迫する。白金の自然教育園ではカラスが集まって来ると同時に、ヒヨドリなどの他の鳥が自然教育園の森から外に飛び出して行くのが観察されている。また、鳥類だけでなく、森の生態系全体に悪影響を与えることも考えられる。特に、既存の自然を活用する予定であるこの公園では、カラスのねぐらの存在が、公園利用に影響を与える問題ともなりかねない。

ねぐらをつくりにくい森



このような場合、羽のあるカラスに集まるなどといっても難しいが、少しでも集まりにくい環境づくりをすることによって、公園予定地の森の生態系を健全に保っていく必要がある。そのための一つの方策として、常緑樹林の林相転換を行ない、カラスの集まりにくい森づくりを行なうことが考えられる。具体的な手法としては、段階的に除伐したり、パッチ状の皆伐を行なうことにより、周囲からの自然侵入や埋土種子の発芽を促し、徐々に広葉樹の割合を増やし、林相の転換を図っていく。



川崎市緑化センターのわがやりの数
(1993.1.18. 木)

15:55~16:15	227羽
16:15~16:35	152羽
16:35~16:55	100羽
16:55~17:05	47羽
計 656羽	

・約7~7羽はペアを組んでいました



参考文献：唐沢寿一著 カウスほど決ほど賢いか 中公新書

(『Coppice』 N0.5 より転載)

もし、長期間にわたってこのような林相転換を行ないながら、カラスの生息数やねぐら利用の有無およびその状況をモニタリングできれば、カラスの集まりにくい森づくりの参考になるデータがとれるのではないだろうか。また、基礎データとして、カラスのねぐらが森林生態系に与える影響を具体的に明らかにしていくことも、都市自然を考えるうえで興味深いテーマである。

最近、中部地方のある町で数千羽のムクドリがケヤキの街路樹にねぐらを作り、付近の住民から苦情が絶えないため、管轄の土木事務所からその対策についてのコンサルティングを依頼さ

れた。ムクドリが集まった原因は定かではないが、ヒアリングによると、かつて近くを流れる川の河川敷の竹林にねぐらがあったが、環境整備のために竹林を伐採した後からムクドリが街路樹に集まるようになったという。カラスのねぐらに限らず、このような問題は全国各地で起こっているようだ。

都市域での環境共生

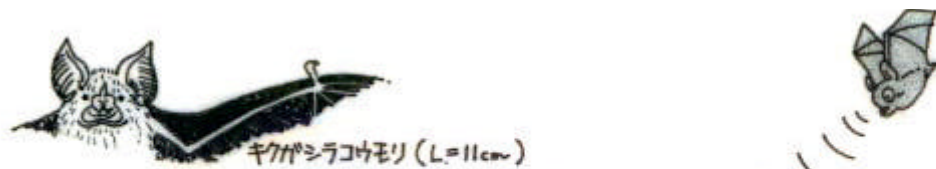
ムクドリやねぐらを除去して生活環境を守ることは、もちろん大事なことだ。しかし、一方で生きものとの共生をうたいながら、特定の生物だけ増え

て生活に不便が生じると、今度はそれを排除しようという場当りのな環境管理を行なわざるを得ない現実がある。

都市域における生きものとの共生は、我々の生活環境を快適にするためにも、また、健全な次世代を育成していくという環境教育的な側面からも重要な課題であり、その重要性は社会的なコンセンサスを得つつある。しかし、ただ単に生きものが身近にいればいい、というだけでなく、バランスのよい健全な都市生態系を維持していくことが重要であると感じる。特定の動物だけが増えるような不健全な生態系では、やはり本当の環境共生とは言えないだろう。

(代表取締役社長・高塚敏)

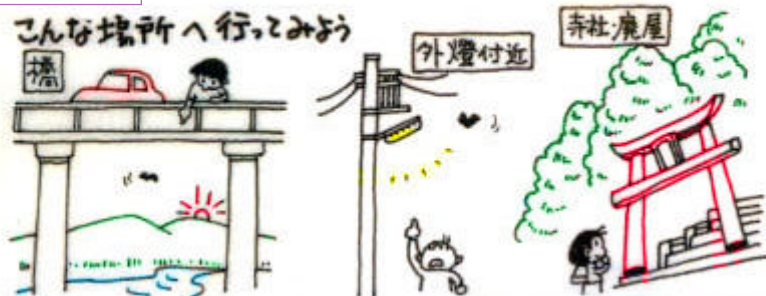
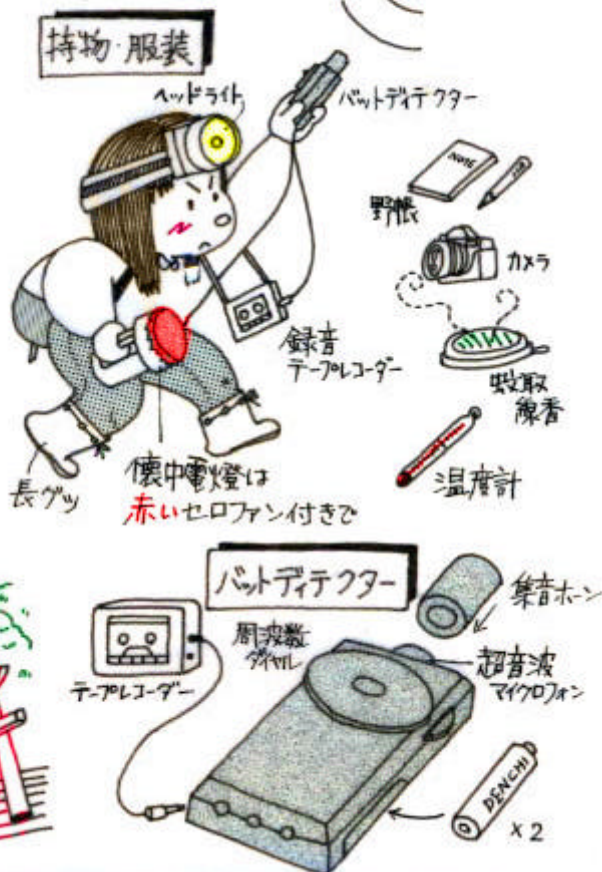
コウモリ類の調査法



日本には約30種ほどのコウモリが生息しています。分布や生態が解明されていない種が多く、レッドデータブックの希少種にあげられている種も少なくありません。

コウモリ類の調査にはかすみ網を用いた捕獲調査が一般的ですが、それには捕獲許可証が必要です。また他の哺乳類に比べ生息確認が困難なこともあり、これまでのアセスメント調査や自然環境調査では、調査の対象と扱われない傾向がありました。

今回は、通常の哺乳類調査時に行えるバットディテクター（以下B.D.）を用いた調査法と、かすみ網による調査法について説明します。ここでは、食虫性の小型のコウモリを対象とします。



バットディテクターを用いた調査

コウモリは超音波を出す動物で、その音の反響によって物を定位する能力を持ちます。これにより、暗闇の中でも障害物にぶつからず自由に飛翔したり、空中を飛び回る動きの速い昆虫を捕らえることができます。前述のB.D.は、コウモリを出す超音波を人間の耳に聞こえるように変換する装置で、暗闇の中でもコウモリの飛翔を確認することができます。また、コウモリは種によって出す周波数帯のピークや音のリズムに違いがみられることから、野外での識別にある程度利用できます。特にキクガシラコウモリ科のコウモリは、コンスタントな周波数を主に出すコウモリで、B.D.を用いた調査では捕獲することなく種の同定が可能です。しかし、ヒナコウモリ科のコウモリでは、似かよった周波数帯にピークを持つ種もあり、B.D.だけでなく、飛翔形や大きさ、周辺環境を考慮に入れ、種の推定を行うことが必要となります。B.D.によ

るサンプルデータを『コウモリウォッチングガイド』（ナチュラリストクラブ、1995）から転載したのが以下の表です。

種類	ピーク周波数 (kHz)	周波数の範囲 (kHz)	音の感じ、大きさ
コキクガシラコウモリ	110	105 ~ 115	ビビビビババポ...
キクガシラコウモリ	68	65 ~ 70	ビビビビババポ...
モモジロコウモリ	40 ~ 60	40 ~ 70	ブツブツ...
アブラコウモリ	45 ~ 50	30 ~ 50	チチチチ...
ヒナコウモリ	20 ~ 25	20 ~ 40	ビュッピ、タン、タン
ヤマコウモリ	20 ~ 25	20 以下 ~ 30	ビュッピ、ビュッピュッ

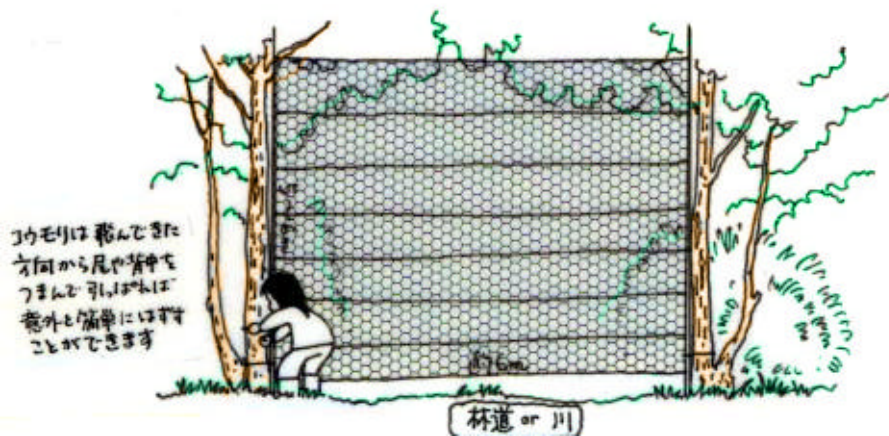
では、野外ではどうすればよいのでしょうか。

まずは、コウモリのねぐらや採餌場所となる環境を探し、糞や食痕などの痕跡を探します。ねぐらは種によって異なり、次の3タイプに大きく分かれます。原生林や神社、屋敷林などにある大木の樹洞を利用する樹洞性のコウモリ、鉱山跡や防空壕などの洞窟を利用する洞窟性のコウモリ、人家や学校などの建物を利用する住家性のコウモリ

です。また、廃屋などは洞窟性コウモリが単独で利用することもあります。

採餌場所として見つけやすいのは、強力な光源のあるダムサイトや野球場、外燈など、餌となる昆虫が集まる場所です。水辺周辺も好適な採餌場所、川の平瀬や淵、池や湖などで、発生する水生昆虫などを採餌します。また、樹幹の鬱閉した林道も採餌や移動のルートとして利用します。

調査は、可能性のあるねぐらや採餌場所の日没頃から待機し、B.D.を用いてコウモリを確認します。洞窟や廃屋に侵入できる場合は、懐中電灯とB.D.を用いて種の確認を行います。特に洞窟は、どう利用されているかを調べるが大変重要です。その地域のコウモリの繁殖や冬眠の場所になっているかもしれないからです。この際注意すべき点は、コウモリが大変神経質になる出産初期（6～7月頃）は洞窟への侵入を避ける、冬眠時期には、調査を短時間で切り上げ、コウモリを目覚めさせない、などです。



索表、哺乳類科学46;11-20』(前田喜四雄,1983)や『日本の哺乳類』(東海大学出版会,1994)を用います。

コウモリ類調査の必要性

コウモリ類の調査は特殊なイメージがあり、なかなか調査する側にも受け入れられないのが現状です。コウモリ類の生息がその自然環境をどう指標するかについてはまだ研究途上にあります。しかし、日本に住むコウモリのうち樹洞性コウモリが大半を占めることや、森林内の昆虫類の個体数調整に果たす役割が大きいことなどから、コウモリは森林という生態系の中の重要な一員であると考えられます。現状では、森林伐採や洞窟の消失とともに、確実に個体数を減らしている動物です。知らない間にいなくならないように、まずは調査対象に掲げる姿勢が大切かと思えます。

(フリー調査者・今関真由美・特別寄稿)

かすみ網を用いた捕獲調査

コウモリの捕獲には「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」に従い、捕獲許可を得る必要があります。許可期間は6ヶ月以内で、事務処理に3~4ヶ月ほどかかることがあるため、コウモリの活動時期(春から秋にかけて)を考慮するとかなり早めの手続きが必要です。

かすみ網を設置する場所は、夜間、事前にB.D.を用いてコウモリの利用するルート調べておきます。これをしておかないとせっかくの調査を棒に振ることになります。用意する物は、かすみ網(いろいろな大きさがある)、竿(ア

ユ竿や塩化ビニール管など)、軍手、懐中電灯、計測用具、温度計、紐です。

森林内や水辺で採餌するコウモリを捕獲するには、図のように、樹冠が閉ざされ空いた空間をかすみ網でほぼ完全に遮断できるような場所を選定します。竿は周囲にある木の幹や石などにくりつけ固定し、日没前には網を張り待機します。かすみ網の見回りは、15分から30分おきに行い、捕獲されたときは速やかに網からはずし、軍手などの小さな容れ物に移し入れます。かかったコウモリを放置しておくと、穴を開けて逃げることもあるので注意が必要です。同定には『日本産翼手目の分類検

哺乳動物調査物語

理想と現実... についての巻



おしまい

(原案◆本社自然環境調査室・浅尾勝彦/イラスト◆飯塚要)

あ

まにに衝撃的なタイトルを見て思わず手に取ってしまった。森林は酸素を供給する「地球の肺」でも「水を溜める自然のダム」でもない等、これまで「常識」のように言われてきた「地球に優しい」自然保護論をバッサリ斬り捨てるやや過激とも思える理論で始まっている。本書の内容は以下の3部構成となっている。

第①部 間違いだらけの森林危機の論じ方

第②部 森林の常識を疑う

第③部 林業は森林破壊の元凶か？

第①部、第②部では森林危機をめぐる根本的な事実関係を科学的な目から洗い直し、第③部ではとかく敵視されがちな林業の実態を中心に、木の現場に暮らす人々の問題にも目を向けている。

本書は極めて過激なタイトルではあるが、内容は様々な参考文献を調べ、さらに各方面の研究者を取材し意見を求めたり、実際に林業の現場を体験して現況を見ている。著者が自分の足で情報を集め、科学的根拠から「自然保護・森林保護論」に考察を加えている。そして単に批判するだけでなく随所に提言も行っており、むしろ堅実な内容と言えるだろう。著者は第三部の終章でこのように述べている。

「自然保護、とりわけ森林の保護を唱えるのがいけないというのではない。現在の森林保護の論調が、あまりに基本的な森林知識や林業の姿を知らないまま議論されている点を危惧しているに過ぎない。医者が診断を誤って治療したら患者の命が危ないように、根本的なところで

「森を守れ」が森を殺す！

誤っていれば保護どころか自然破壊を進めかねない。(中略) 必要なのは、まず正しい知識を身につけることではないのか。そのうえで議論するなり考察するなりして、どんな対策を取るか結論を出せばよい。しかし、誤った情報を元にした結論を行動に移せば、ろくな結果を生まないだろう。」

本書の中で特に印象に残ったのはホタルに関する記述である。各地でゲンジボタルの棲む川の復元や人工河川作りが進んでいる。〈清流に棲むホタル〉の群舞は美しい自然の代名詞のように扱われている。しかし、著者が取材した淡水生物研究所の森下郁子氏はこう述べている。「(前略) 数が増えるのは、ホタルが人間の作った田園環境に適応したからなの。適度に汚れていて隠れ処も餌となるカワニナもたくさんいるから、大発生して飛び回るわけよ」あまりに水や周辺環境をきれいにし過ぎてカワニナの隠れ処までなくなり、結果としてホタルが棲めなくなってしまった例も報告されている。著者はこれを受け、濁って悪臭を放つ〈人間にとっての汚い川〉も、土や有機物が



田中淳夫／著 洋泉社発行

溶け込んでいれば、それらが生物の栄養となり個体数や種類の増加につながると論じている。

極論と言える主張であるが、これは決して川を汚してもよいと言っているのではない。人間が見て美しい川(自然)と生物の生息に適した環境とは同一ではない。ホタルは美しいから大切だが、ユスリカや赤潮は不快だからイヤというのでは勝手すぎる。人間の美意識を自然に持ち込むのは危険だと指摘しているのだ。

最近、河川環境の復元に関する業務も増加しており、ホタルはブームのようにになっている感もある。ホタルの観られる場所も多くなっているが、ホタルがいるから自然が復元されたという誤解が少なからず一般にあるように思う。私自身、これまでの調査等でとてもきれいとはいえない河川にもホタルが生息しているのを見ており、清流にしか棲めないというイメージには疑問を持っていた。

本書を一読して、調査に携わる我々は、一般に誤解されがちな〈自然の復元〉や〈生物の多様性〉について、真実を正しく理解してもらう使命をも担っているのではないだろうかと思った。

(大阪支社自然環境調査室・井上剛)

◆著者紹介◆

田中淳夫

1959年大阪生まれ。静岡大学農学部林学科卒業。フリーライター。主な著書に『不思議の国のメラネシア』『チモールの知られざる虐殺の島』(共に彩流社) などがある。

第4回全国水環境交流会

1996年11月2日～3日

於●松下電器産業(株)教育訓練センター

主催●全国水環境交流会近畿大会実行委員会

共催●松下電器産業労働組合、地域と暮らしネットワーク

協賛●(財)大阪21世紀協会、環境事業団地球環境基金、(財)国際花と緑の博覧会記念協会、(財)日本グラウンドワーク協会、(財)日本財団、(財)琵琶湖・淀川水質保全機構

去る11月2日～3日に第4回全国水環境交流会「近畿大会」が淀川に面した大阪府枚方市で行われた。

この会は、1993年に埼玉県草加市での第1回全国水環境シンポ&交流会を契機に発足し、その後第2回が千葉県柏市で、第3回が静岡市で行われており、今年初めて近畿圏で開催されたことになる。なお、全国水環境交流会は全国をネットワークする組織であるが地域ごとにも活動しており、今年も北海道、東北、九州などで自主的なシンポジウムや勉強会、一斉清掃などを実施しているそうである。

今回の近畿大会のテーマは「水の恵み得るもの、水への恩返し」であり初日には、基調講演、分科会、交流会などが行われ、二日目は記念講演とともに琵琶湖や淀川など様々な場所でエクスカッションが行われた。

私は初日のみの参加であったが、基調講演では、農業、漁業、市民団体の活動など様々な立場からそれぞれの実践例が紹介され、非常にわかりやすく、また水環境が我々の生活に密着していることがあらためて実感された。分科会は15のテーマで開かれ、私の参加した「森の教室」でも基調講演と同様、森林あるいは林業と都市域の生活者との関わりについて考えさせられる内容であった。

本大会にあえて問題点を挙げるとすると、基調講演の時間が足りず参加者の生の意見を交流できなかったこと、分科会が多すぎて聞きたい分科会全てには参加できなかったことだろうか。しかし、これは夜の交流会や第2分科会で解消されたのではないと思う。

【近畿大会】

水環境シンポ&交流会

～水の恵み得るもの、
水への恩返し～

この会の事務局には当社の社員も参加しており、開催までの何回にもわたる実行委員会や、大会前日の準備などの状況を身近にかいま見ることができた。本当に数多くの打合わせを重ね、イベント業者の介在しない手作りの会がいかに裏方さんの苦勞で支えられているかを見ることができた。と同時に、それらの人々の人脈というネットワークのすごさに驚かされました。また、この大会

では、松下電器産業の労働組合が事務局として参加しており、大会会場も会社の教育研修センターを利用させていただいている。いわゆるメーカーの企業の方々がこのような『環境』を取り上げたシンポジウムに参加・協力するというのも、時代の流れだけではなく、個人の意識のなかへも環境問題が浸透していつている証ではないだろうか。(大阪社社長・浜田拓)

分科会テーマ・講師一覧(敬称略)

- 農業と自然環境……………宇根豊 (「田んぼの忘れもの」)
- 森の教室……………栗本修慈 (林業コンサルタント)、
海老沢秀夫 (朝日森林文化協会)
- 水辺の楽校……………君塚芳輝 (淡水魚研究者)
- 治水とくらし～都市の川～……………吉村伸一 (よこはまかわを考える会)
吉川勝秀 (国土開発技術研究センター)
- 水辺づくりの技術……………片寄俊秀 (関西学院大学)
- 市民生活と水循環……………藤井絢子 (滋賀県環境生活協同組合)、
広松伝 (「柳川掘割物語」)
- 市民参加とパートナーシップ……………渡辺豊博 (日本グラウンドワーク協会)、
八木俊輔 (松下電器産業労働組合)
- 通信ネットワークと市民連携……………幸野敏治 (Niftyserve 川のフォーラム)、
杉原寛 (鶴見川流域ネットワーク)、
宗田好史 (京都府立大学)
- 歴史遺産と街づくり……………山口祐造 (石橋研究家)、伊東孝 (日本大学)
- 水と地場産業……………萩原孝一 (自然食品「ポケット」)
藤井吉造 (藤井農園)、北村真一 (「喜多品」)
- 漁業の立場から……………鷺尾圭司 (明石・林崎漁協企画研究室)
- ヨーロッパと近畿の水事情……………大槻均 (財)琵琶湖・淀川水質保全機構
- ヨシ原の生き物……………恩地実 (甲南高校教諭)、
鍋島靖信 (大阪府立水産試験場)
- 農地の水路技術を考える……………笠文彦 (龍谷大学理工学部)
- 流域ネットワーク……………木村正徳 (木津川流域ネットワーク)

■「あっ、ネズミ、いや、ヤマネだ!!」

ぼくの目の前1mもないミズナラの幹に突然ヤマネが現れたものだから、思わず大きな声を出してしまった。ぼくを驚かしたヤマネは、今度はぼくに驚かされてか、ミズナラの幹をすばやく登っていった。昼食を終え、さあ、キノコ狩りの続きに出かけようかと、皆が準備を始めた時だった。広いミズナラ林の中で、ぼくの周りに人垣ができていた。けれども当のヤマネはとくにその樹の高いところへ避難済みである。ヤマネが現れてから樹上へ逃げるのも、人が集まってくるのもアッという間の出来事だった。

10月中旬の裏磐梯。昼は少し動くと汗ばむほどの陽気だが、日が沈むと足元からぐっと冷えてくる。紅葉が始まり、山の幸は旬を過ぎようかという頃。ぼくは自然体験キャンプのスタッフとして、この裏磐梯の湖畔のキャンプ場に来ていた。食べるものは美味しく、見るものは美しく、焚き火が恋しく感じる実にいい季節である。そんな季節の山の恵みを我々もわけてもらおうと、出かけた時のハブニングだった。

「何処に行ったの?」「さわってみたい。」「よく見えないよ。」

などなど、皆が口をそろえる。

「さわってみたい?」

思わず口に出てしまい、皆をたきつけてしまった。普通、自然観察などのマナーとして、野生の生き物（ここでは特に哺乳類のこと）にさわるとは絶対にしないのだが、このときはずっと見てみたいと思って、いたヤマネに初めて出会って、完全に舞い上がっていた。

「登って行って捕まえよう。」

「樹を揺らしたら落ちてくるんじゃない?それを受け止めようよ。」



ヤマネ (写真出典; 東海大学出版会「日本の哺乳類」)

ある日のフィールド・ノートから

出会いを通して

いろんなアイデアが出てくる。しかし、12～13mはあるかという樹である。そう簡単に揺らせるわけもなく、また、ヤマネのいる10m近い高さの細い枝まで、人が登れるはずがなかった。じきに皆あきらめ、ぼくを含めた数人をそこに残してキノコ狩りへと行ってしまった。それから1時間、ずっとヤマネを見ていたが、動いた距離はわずか1mたらず。細い枝から木の幹に戻っただけだった。キノコ狩りに行った人が戻り、我々全員がその場を離れた後に、参加者の1人が改めて見に行くと、そこにはヤマネの姿はなかったようだ。きっと、もっと早く降りたかったにちがいない。申し訳なく思いつつ、また、ヤマネが無事逃げられたであろうことを知り、少しほっとして帰路に就いた。

その日の夜、焚き火を囲んでいるときに、こんな声を聞くことができた。

「ちょっといじめているみたいでかわいそうだったなあ。」

「もっとよくヤマネを見 たかったけど、捕まえなくてよかったね。」

ヤマネ

日本固有種。ネズミに似るが、尾に長い毛が生じ、背中に黒褐色の線が1本はいるのが特徴的。国の天然記念物に指定されている。

ヤマネには迷惑をかけたが、一度こうした経験をする事も必要なかもしれないな、と思えた。

■野生動物にさわるとは、場合によっては彼らを死に至らしめる。今回のケースとは少し違うが、飼育下にあるヤマネが、人の匂いのついた自分の子の世話を放棄した例もある。こうした例はヤマネに限らず、いろんな生き物で聞かれる。

野生の生き物を無意味に、また、興味本位で追いつめることは許されることではない。また、偶然の場合であっても、今回のような接し方は、ヤマネをおびえさせてしまうだけで、間違いであった。だが、経験を通すことで我々はそれを初めて肌で感じたり、知識から理解へとつながることができた。次に同じようなことがあったら、それが突然でも、私を含め、皆もっと違った接し方をすることができるだろう。

また、「ヤマネ1匹ぐらいで、」という見方もあるかと思うが、大袈裟に言ってしまうと、そうした発想が多くの環境問題解決の鍵を握っているのではなかろうか。

■自然体験キャンプは、非日常の生活の中に、自然とふれあう要素がたくさん詰まっている。自然を好きになり、理解し、つきあい方を学ぶ、そしてもっと自然が好きになれる、そうした気持ちと、知識と、技術とがバランス良く成長できる場であることをあらためて実感した。

(本社企画室・中村兼吉)

先日、仕事をしていると、突然正面の窓ガラスに何かがあたった。なんだろうと思って見てみると、カキを投げつけたような跡がついている。子供のイタズラかと思ったが、次の瞬間、鳥がぶつかったのだとわかった。急いで外に出て探してみると、植え込みからハトサイズの鳥がふらふらと飛び去っていった。ガラスに気づかなかつたり、なわばりを主張する鳥が窓に写った自分につこんでくることがよくあるとか。何とかしてやれないものだろうか。(中村)

急に冷え込んだ朝、今年初めて冬の匂いをかいだ。子どもの頃の記憶がいっぺんによみがえる。がさがさと落ち葉を踏みわけて通った通学路。すすきの原っぱに〈基地〉を作って遊んだこと。子どもたちが今何をして遊んでいるのか知らないけれど、外遊びがすたれていないといいな、と思う。楽しいことの選択肢はたくさんあったほうがいい。ゲーセンも楽しいし、原っぱでひつつきむし(くつつく草の実)まみれになるのも楽しいものね。(南谷)

News Letter N0.6 1996年12月

【発行】……………株式会社地域環境計画

●発行人……………高塚敏

●編集……………南谷佳世・中村兼吉・西邑恵子

■東京本社

〒154 東京都世田谷区桜新町2-22-3 NDSビル

TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701

◆営業窓口……………逸見一郎

■大阪支社

〒569-11 大阪府高槻市古曽部町1-1-8

TEL 0726-84-3182 / FAX 0726-84-3184

◆営業窓口……………中山香代子・津田洋子